

ダイソン博士逝く

第十代グリニチ天文臺長 勲任天文博士 H. Spenser Jones

本會急報第350號で取り敢へず報じた如く、前グリニチ天文臺長サ1 Frank Watson Dyson 博士は71歳の高齢を以つて去る五月25日逝去された。下にスペンサ・ジョンス氏の筆になる小傳(抄譯)を掲げる。

ダイソン博士は1868年一月8日に生れ、Bradford 小學校とケンブリヂの Trinity 學院で教育を受けた。彼はケンブリヂ在學中、成績優秀で、度々賞を受けた。1894年、H. H. Turner 氏がオクスフォード大學教授に任ぜられたので、氏は其の後繼者としてグリニチ天文臺の首席助役となり、1906年にはスコットランドの勲任天文博士となつたが、遂に1910年にはグリニチ臺長に進んだ。

ダイソン氏の最初の大事業は、W. G. Thackeray 氏と共に、Groombridge の周極星目録の新版を作製したことである。ステイヴン・グルームブリヂとは隠退した商人で、1806年から1819年まで Blackheath に私立天文臺を建て、3吋半口径の子午環(焦點距離5呎)で4000ケの週極星を27000回にわたつて観測した篤志家である。観測も器械の取り扱いも共に見事であつたが、整理の方法が現代的でなかつたので、ダイソン氏等は、観測原帖から全く新しく整理しなほした。それから、グリニチでは此等のグルームブリヂ星を観測し直し、こうした前後2回の観測から、固有運動を算出した。此等の固有運動は歳差や太陽運動の決定のために利用された。此うした研究は1905年に終了した。恰も其の前年、カプティンは1705—62年のブラドロの観測の分析研究によつて星流の存在を發見したので、上記のグルームブリヂ星の固有運動をグリニチの首席助役となつた A. S. Eddington 氏が利用して、カプティンが用ひたよりも遙かに遠距離の星から、星流を確證した。

グルームブリヂ星の研究から、ダイソン氏は恒星の距離、運動、分布、光力等の關係を追及し、1910年以後、多くの論文を發表した。

ダイソン氏は、首席助役時代から、恒星の寫真目録作製のため撮影を勤み、國際天文條約によつてグリニチ天文臺に分擔させられた北緯 65° から北極までの星々の位置を測定した。臺長となつて、更に此等の研究を獎勵し、大運動星

の視差測定や、寫真光度の觀測や、有効波長の決定等をやり、又、上記の寫真目錄星の撮影を(こんどは逆面に)再び施行し、前のと比較して、迅速に固有運動を測定した。

皆既日食の諸問題も、ダイソン氏の注意を惹いた。氏は幾回も觀測遠征に行き、一度も曇天に合はない幸福者だつた。1927年、英國内で見えた日食の時など、グリニチ隊を率ゐてギグルスネクに出張したが、他は皆曇天であつたのに此の土地だけは晴天であつた。氏は此所で色球層やコロナのスペクトルを觀測した。

1919年五月の日食遠征を發表したのはダイソン氏だつた。始め、1917年の頃、氏はアインシュタイン原理の研究のため、恒星の光の屈曲を確かめるのに1919年の日食が好都合であることを知り、間もなく歐洲大戰が終了する見込みを以つて、二つの遠征隊を派遣することを計畫した。此の觀測が、果して如何なる結果を齎したかといふ詳細を茲に述べる必要はあるまい。其の見事な成果により、アインシュタインの原理は世界一般の認める所となつた。1933年、ダイソン氏は隱退し、其の後、R. v. d. S. Wooley氏と共に“Eclipses of the Sun and Moon”を1937年に著した。此の書は日食の最良書である。

ダイソン氏は時刻や時計製作術に興味を有し、かの B. B. C. 放送局から全世界へ正確な標準時として放送する“六點式”の報時を創意した。氏は永く大英時計學院長となり、1928年に其の學院より金牌を受け、尙ほ、時計製造協會員であつた。

歐洲大戰後、理學の國際協力が叫ばれた時、ダイソン氏は國際研究會議や國際天文同盟の組織に盡力し、天文學の各方面に於ける國際協力の實現を見るに至つたのは、氏の努力と指導に負ふ所が多く、遂に1928—1932年に氏は天文同盟長となつた。

ダイソン氏は1911—1913年にはロイヤル天文學會長となり、1916—1918年には大英天文協會長、1913—1917年にはロイヤル學會長となつた。又、1921年にはロイヤル學會からロイヤル賞牌を受け、翌1922年にはパシフィック天文學會のブルース金牌を受け、1925年にはロイヤル天文學會の金牌を受けた。尙ほ、オクスフォード、ケンブリヂ、エデンボロ、ダラム、リイズ、トロント、パリス、

メルボンの各大學から名譽學位を受け、外國の多くの學會やアカデミの會員に推された。又、1915年にはナイトとなり、1926年には K. B. E. となつた。

グイソン氏の人格は多くの人を惹きつけ、其の部下のためには良い主人であると共に、良い友であつた。氏は Caroline Best 嬢と結婚し、二男六女を挙げたが、夫人は不幸にして1937年に死なれた。世界各國の天文家も、氏の家庭で心地良く歓迎された。氏は又、社會のために盡す所が多かつた。

慰め手として

本 多 顯 彰

科學史を見ると、科學の研究は人間に一番遠いところ、すなはち天文學に始まり、次いで物理學、化學、地質學を経て、生物學に至り、最後に人間の研究といふことになつてゐるといふことだ。これはバートランド・ラッセルの意見ださうだが、なかなか興味のある意見だ。

× × ×

科學も天文學となると、感情も偏見も混へないで、純粹に客觀的な觀察と研究とが出来さうに思はれ、物理學においてもさうだと思はれるが、生物學となるともう駄目だ。ましてや人間の科學となると、研究者自身が人間なのだから純粹な客觀など望むべくもない。この研究が一番後廻しになつたのも當然だ。

人間の科學は大いに發展を遂げ、その研究は微に入り細を穿つといふほどのものになつたが、一番大きい、そして最後の問題、すなはち人間は何であるか、何のために生きるかの問題は、おそらく永遠に解決されないであらう。尤も、これは科學の問題であるよりは、宗教の問題であらうけれども。

× × ×

しかも現代人は、この問題の宗教的解決よりはむしろ科學的解決を求めてゐる。そして、それは、まさに一命を君國に捧げようとしてゐる人々やその家族たちによつては切迫した必死の問題なのである。この頃生死の問題を扱つた書物の出版が目立つやうだが、それを貪り読み、そして恐らく幻滅を感じるだらう人々のことを思つて、私は熱いものを感じずにはゐられない。